学園だより
名古屋電気学園
愛知工業大学
愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学名電高校
愛知工業大学名電中学校

目次：

辞令交付式 2
学長賞に５氏 3
設置校入学式 4
選抜卓球中高Ｖ 5
ロボットで餃子 6
日中友好のラリー 7
愛名会総会 8

発行所
名古屋電気学園
〒470-0392
豊田市八草町八千草 1247
℡ (0565) 48-8177

名古屋電気学園の第Ⅰ期中期経営方針

学校法人名古屋電気学園は第Ⅰ期中期経営方針を理事会で承認し、四年後の二〇二二年に迎える学園創立百十周年に向けてさらなる発展を目指すための「ミッション」と「ビジョン」を打ち出しました。

教育のモットーである「創造と人間性」に基づき、社会の発展に貢献する豊かな人間性を備えた人材の育成をミッションとし、ビジョンは「α（アルファ）」と命名して「教育ビジョン」「研究ビジョン」「社会貢献ビジョン」の三つのビジョンを策定しました。その実現のため、五つの重点戦略に取り組みます。

「α」とは、ギリシア文字の第一字であり未知数をあらわすことから、中期経営計画の第一歩であるとともに、その成果から生まれる「プラスα」の期待をあらわします。

今後、この中期経営方針に基づき、各設置校で中期経営計画を策定し推進することになります。中期経営方針の実行に向け、事務組織も「グループ制」の導入を核に大幅に改編しました。

■ビジョン「α」三つの柱■

【教育ビジョン】 産業界・教育界の要望を踏まえ、ものづくりを支える、質の高い教育を確立し、コミュニケーション能力の高い、問題解決力をもつ人を育成する

【研究ビジョン】 研究支援体制を充実させ、創造的研究に取り組み、産業界に評価される研究成果を発信する

【社会貢献ビジョン】 地域のニーズに対応して、地域社会と協調を図りながら、教育・研究成果を地域の産業、文化の発展・活性化に貢献する

■ビジョン「α」実現のための五つの重点戦略■

①入学戦略　学生・生徒の確保（確実な入学者受入）
②教育改革・学生支援戦略　学生・生徒の満足度を向上させる組織的教育システム構築
③地域連携戦略　名古屋・豊田・瀬戸エリア他との地域連携推進
④経営基盤強化戦略　収支の適正化
⑤キャンパス整備戦略　教育研究環境の充実（魅力あるキャンパスづくり）

後藤泰之理事長・学長の年度始めの挨拶

（要旨、四月二日・八草キャンパス）

前々から言っております「二〇一八年問題」の年となりました。明日の大学の入学式で一三二三名の学生を迎えます。去年と比べると二〇〇名ぐらい少ない入学者です。私立大学の入学定員に対して、超過率と充足率の厳しいしばりが現れてきています。非常に狭い範囲の中に入学者を収めなければならず、至難の業になってくると思います。

平成三〇年度は順調に目標の入学者数に到達できると思っていましたが、ぎりぎりになって大幅に辞退が出ました。その時期になって他の大学がたくさんの追加合格を出し、影響を受けて辞退が一四〇名ぐらい出てしまいました。本学にこれまで追加合格の制度はありませんが、検討しないといけない時期に来ているかもしれません。

私学に対する締め付けがますます厳しくなる中、さらなる教育の質の向上が求められています。今年度から教育向上会議を設け、新たな取り組みを始めていきますので、関係する方々に協力をお願いします。今後、私学として発展していくために学園と設置校が一体になり、一つの方向を向いて取り組んでいくことが大事と考えています。

このたび、名古屋電気学園の第Ⅰ期中期経営方針を決めました。策定したミッション、ビジョンに基づき、各設置校が肉付けをします。これに伴って事務組織を大幅に改編し、新たにグループ制を導入して若い職員が活躍できる制度をつくりました。それぞれの持ち場で教職員の皆さんは、学生にとって何が一番いいことなのか、必要なのかを考えていただき、その中で自分が何をしなければいけないか、何ができるのか、もう一度見つめなおしていただきたいと思います。

後藤淳・学校法人名古屋電気学園総長は、かねてより病気療養中のところ、六月一日午後、逝去いたしました。葬儀等は密葬にて執り行われました。なお七月三日に学園葬を行う予定です（詳細は未定）。

平成三十年度 学園辞令交付式／年度始め式

年度始めの挨拶をする後藤泰之理事長

四月一日付の人事異動で、学園の新体制がスタートしました。学園が策定した中期経営方針に基づく大幅な組織改編を受け、二日に行われた年度始め式で後藤泰之理事長が教職員の結束を呼び掛けました。

この日は年度始め式に先立って平成三〇年度辞令交付式が本部棟で行われ、新規採用者、任命・昇格者に後藤理事長から辞令が交付されました。

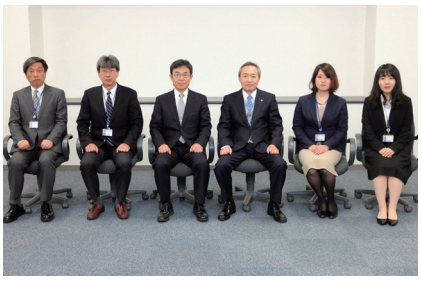
新規採用者は大学教員十三人、高校・中学教員四人、事務職員七人の合わせて二十四人です。任命は大学教員が三人で、入試センター長に服部洋兒教授（再任）、図書館長に村瀬洋教授、エクステンションセンター副センター長に小池則満教授です。高校教員が一人で、後藤芳樹教頭です。専門学校教員が一人で、専門学校校長に飯吉僚教授です。昇格は大学教員三人、事務職員七人です。学園理事らが立ち会い、一人ひとりに後藤理事長から辞令が交付されました。

後藤理事長は挨拶で「学生・生徒にとって何が一番望ましいことかを考え、各設置校のことだけでなく学園全体を見ながら取り組んでいただきたい」と呼び掛けました。

年度始め式は八草キャンパス十号館で学園・大学の教職員が出席して行われ、後藤泰之理事長・学長が挨拶しました＝1面に挨拶要旨。新規採用・任命・昇格者の紹介や、学長賞の表彰＝記事3面＝がありました。この日は若水キャンパスでも後藤理事長が年度始めの挨拶をしました。

新規採用の大学教員の皆さん

専門学校校長に飯吉僚教授
名電高校・後藤芳樹教頭



新規採用の高校・中学教員の皆さん

新規採用の事務職員の皆さん

辞令を交付された皆さん

■新規採用

【大学教員】飯島信司教授（応用化学科）、福森健三教授（応用化学科）、西島義明教授（機械学科）、仁科健教授（経営学科）、竹内和歌奈准教授（電気学科）、佐藤暢也准教授（応用化学科）、太田英伸准教授（機械学科）、原田祐志准教授（機械学科）、野澤英希准教授（建築学科）、山本貴正准教授（建築学科）、柊紫乃准教授（経営学科）、水谷聡志准教授（経営学科）、玉森聡講師（情報科学科）

【高校教員】臼井俊哉教諭、小川明広教諭、服部和都美教諭

【中学教員】梅田千夏教諭

【事務職員】間瀬好康参事、米坂篤人事務職員、森本耕平事務職員、松本直紀事務職員、武井則近事務職員、大鐘亮事務職員、澤田摩耶事務職員

■任命

【大学教員】服部洋兒入試センター長＝再任（経営学科教授）、村瀬洋図書館長（電気学科教授）、小池則満エクステンションセンター副センター長（土木工学科教授）

【高校教員】後藤芳樹教頭

【専門学校教員】飯吉僚専門学校長（大学電気学科教授）

■昇格

【大学教員】内田敬久教授（機械学科）、佐野泰之教授（建築学科）、倉橋奨准教授（土木工学科）

【事務職員】林敬二郎次長（総務人事部）、後藤卓弥次長（総合企画部）、横井浩治事務次長（入試センター）、大茂真事務長（キャリアセンター）、石川裕之事務長（若水事務部）、宮島宝七子課長（総務課）、森島映子課長（給与研修課）

任命・昇格の学園教職員の皆さん

学長賞に五氏　依田客員教授、大久保教授、菱田教授、上羽教授、近藤元部長

大学の平成二九年度の学長賞は四月二日の年度始め式の席上、依田正之元電気学科教授（現・客員教授）、大久保仁電気学科教授、菱田隆彰情報科学科教授、上羽牧夫基礎教育センター自然科学教室教授、近藤修司元情報システム部長の五氏に後藤泰之学長から贈られました。

（前列右から）菱田教授、大久保教授、（前列左から）近藤元部長、上羽教授、依田客員教授

依田正之元電気学科教授

平成一四年度から十六年間、豊田市産業振興委員会委員を務め、最近では豊田市企業誘致審査会の委員長として豊田市に貢献しています。これら活動は本学の知名度の向上と学生の就職に大きな効果があると考えられます。電気設備学会の中部支部理事と本部評議員も務めており、全国電気設備関係の企業や研究機関の社会的活動で多大な貢献をしました。

大久保仁電気学科教授

アメリカの電気電子学会（IEEE）が三年に一度開催する国際会議「液体誘電体に関する国際会議（ICDL）2017」で「ハンス・トロッパー記念講演の賞」を受賞しました。この賞は三年に一度、一人の研究者が選ばれる名誉あるものです。IEEEは電気電子工学分野で世界最大の学術団体であり、本学の研究レベルの高さを世界に示すことができました。

菱田隆彰情報科学科教授

平成二四年度から、学生と共にボランティア活動を推進してきました。平成二九年度に菱田教授が中心となって行ってきたサイバー防犯ボランティア活動が警察庁に認められ、本学に感謝状が贈られました。菱田教授と学生が行ってきたボランティア活動が全国的に認められたことは、本学にとって大きな名誉です。

上羽牧夫基礎教育センター自然科学教室教授

平成二九年度に日本結晶成長学会の最高位である「第十二回業績賞および赤崎勇賞」を受賞しました。上羽教授の研究分野からは初めての受賞になります。今回の受賞により、学術的な活動を通して本学の名声を高めることに多大な貢献をしました。

近藤修司元情報システム部長

昭和五四年に計算センター職員として着任、学内ネットワーク整備に尽力し本学のネットワーク環境の基礎を築きました。情報教育でも教育用ソフトウェアの環境整備に携わり、実習システムをはじめ学生ポータルシステム「co—net」の導入など情報教育環境を充実、向上させました。セキュリティ対策でもポリシーや規程の整備、委員会を設けるなど組織的な体制を構築しました。

定年退職者十八人　辞令交付式で労をねぎらう

学園の平成二九年度定年退職者辞令交付式が三月二十七日、八草キャンパス本部棟会議室で開かれ、大学教員十四人、高校教員二人、事務職員二人の合わせて十八人が三月三十一日付で定年退職しました。退職者一人ひとりに、後藤泰之理事長から辞令と、後藤尚之事務局長から記念品が、それぞれ手渡されました。

後藤理事長は、あいさつで「私学を取り巻く状況が厳しい中で順調に学生・生徒を確保できているのは、これまで築いてこられた皆様方の努力の賜物です。皆様方のお気持ちをこれからも我々が引き継いでいきます。今後も本学にアドバイスをいただければ」と語りかけました。

これに応え、退職者を代表して大学機械学科の渡辺修教授が「自由な研究活動を続けられ、多くの学生と共に過ごすことができましたことを本当にありがたく思っています。今後も理事長先生の下、教職員の皆様が一丸となって未来に向かって突き進んでいかれるものと確信しております」と謝辞を述べました。

この後、後藤理事長を囲んで記念撮影し、和やかに思い出を語り合いました。

定年退職の皆さん

定年退職の皆さん

▽大学教員十四人
渡辺修、依田正之、澤木宣彦、井上眞一、尾之内千夫、立木次郎、佐藤一雄、岡田久志、松本壮一郎、小田哲久、田村隆善、黒河富夫、末永康仁、吉賀憲夫
▽高校教員二人
大鐘一良、小川喜信
▽事務職員二人
近藤修司、矢野敬典

学園設置校四校で入学式

学園設置校四校の入学式は四月三日の愛知工業大学を皮切りに、六日が愛工大名電高校と愛工大名電中学校、九日が愛工大情報電子専門学校と順次行われ、希望を胸にした若者たちが学園の仲間入りをしました。

大学学部一年は一三三三人

新たな仲間を迎えた大学入学式

大学の平成三〇年度入学式は八草キャンパスの鉀徳館で開かれ、工学部、経営学部、情報科学部の三学部に合わせて一三三三人、大学院工学研究科と経営情報科学研究科に合わせて一三三人が入学しました。また学部三年次への編入は一五人でした。

式辞を述べる後藤学長

後藤泰之学長は、式辞で「建学の精神と教育のモットーの意味をしっかりと考え、有意義なキャンパス生活を過ごしてください。周囲の状況や風潮に流されることなく、興味を持って打ち込める何かを見つけてください」と呼び掛けました。

これに応え、新入生を代表し機械創造工学専攻の金島智樹君が「建学の精神を胸に勉学に精励し、学生としての本分を全うする」と誓いの言葉を述べました。

◎…新入生オリエンテーションの一環として四月二日、アイスブレイクのプログラムが初実施され、学生たちが心の壁を取り払って交流しました。アイスブレイクとは初対面同士の緊張をときほぐすための作業で、新入生同士が仲良くなる機会として導入しました。オリエンテーション会場の教室ごとに独自のプログラムがあり、学生たちは「共通点を探そう！」などと題した簡単なゲームを通じて友人を増やしました。

名電高校に六六九人

式辞を述べる岩間校長

愛工大名電高校の平成三〇年度入学式は喬徳館で行われ、普通科五二〇人、専門学科（科学技術科、情報科学科）一四九人の合わせて六六九人が入学しました。国歌斉唱と入学許可宣言に続き、岩間博校長が式辞で「高校は『自分を見つめ、できないことをできるようにすることで新たな自分をつくっていくところ』。失敗を恐れず、何度でもやり直すことが必要」と語りかけました。続いて後藤泰之理事長が挨拶に立ち「まずは具体的で明確な目標を定める、そして目標の達成に向けて努力をする。このことがなりたい自分への近道」と励ましの言葉を贈りました。新入生を代表し、岩田侑樹君が「勉学にクラブ活動に精いっぱい努力します」と宣誓しました。

専門学校には一〇七人
三年連続で定員超える

愛工大情報電子専門学校の平成三〇年度入学式は同校四階の大教室で行われ、一〇七人が入学しました。国歌斉唱の後、飯吉僚校長が式辞で「まず着実に資格を取るなどして、実践力と自信を身につけていただきたい」と期待する言葉をかけました。続いて後藤泰之理事長が「教育のモットーである『創造と人間性』の意味をしっかりと考えて有意義な学校生活を過ごしてください」と挨拶し、太田稔彦豊田市長からの祝辞も披露されました。

式辞を述べる飯吉校長

新入生を代表して高度情報処理学科の大鹿悠蘭君が「建学の精神をわきまえ、学則を守り、勉学に励んでいきたい」と誓いの言葉を述べました。

誓いの言葉を述べる大鹿悠蘭君

名電中学は一二二人

「愛工大名電」の名のもとに新校名となって初の愛工大名電中学校の平成三〇年度入学式は淳和記念館三階体育館で行われ、一二二人が入学しました。入学許可宣言に続き、岩間博校長が式辞で「高め合える雰囲気を全員の力でつくってほしい」と呼び掛けました。続いて後藤泰之理事長が挨拶し「『人を思いやる気持ち』と『自分を思いやる気持ち』を大切に、有意義な中学校生活を」と述べました。在校生代表の歓迎の言葉の後、新入生を代表して久瀬向夏君が「仲間と助け合い、支え合いながら中学校生活を送っていきます」と宣誓しました。

宣誓する久瀬向夏君

選抜卓球　中高そろって優勝　四年連続！

附属中学校卓球部は第十九回全国中学選抜大会の決勝（三月二十五日・島津アリーナ京都）で明徳義塾（高知）を3―0で破り、大会六連覇を達成しました。名電高校卓球部も第四十五回全国高校選抜大会の決勝（同二十八日・福井県営体育館）で野田学園（山口）を3―1で下し、大会四連覇を成し遂げました。中高そろっての選抜優勝は、これで四年連続となります。

学園は五月七日、両卓球部に対して学園表彰を行い、快挙をお祝いしました。学校法人名古屋電気学園愛名会からもお祝いが贈られました。

六連覇を達成した附属中卓球部

高校卓球部は四年連続六回目の優勝

中学は全国大会十一連勝

今大会の中学卓球部は、どこからでも点の取れる戦力が整い、大会前の調整も順調に運びました。それまでの試合でも成長が見られるパフォーマンスがあったため、指導者・選手ともに楽しみに大会を迎えたといいます。

結果を見れば、全試合3―0の無失点完全優勝。ただ、真田浩二監督が大会前に「全国の強豪校に強い選手がおり、前半のシングルスで1点失うことも考えられ、3番のダブルス種目は何が起きるか分からない」と予想した通り、いくつも山場を迎えました。

中間東（福岡）と対戦した準決勝は、1番主将の篠塚大登選手（2年）がエース対決となった試合を終盤果敢に攻め、最終セットまでもつれる接戦をものにしました。3番ダブルスも2―2の接戦となりましたが、最終セットはメンタル状態も落ち着きを取り戻し、結果的にチームのストレート勝ちとなりました。二つの接戦を落としていたら、後半プレッシャーのかかった試合を乗り越えないといけない状況が考えられました。

エースの重責を果たした篠塚大登主将

決勝は、1番から3番までの選手が思い切りのよいプレーで勝利。これで全中と合わせると十一大会連続の全国優勝となりました。真田監督は「選手全員が大会前から、そして当日朝の練習も試合中も、終始良い表情でプレーしていたことから、卓球を楽しんでいたように感じます。このようなメンタル状態になるのは難しいですが、良いパフォーマンスを出すには、とても重要なことです。担任の先生や中学サッカー部も応援に来てくださり、たくさんの方々の励ましをいただきました」と感謝をこめて振り返りました。

高校は苦戦乗り越え

一方、高校卓球部は木造勇人選手（現・愛知工業大学1年）ら昨年度の優勝メンバー三人が抜け、大会前から厳しい戦いになると予想されました。

予選リーグでは、東山（京都）を相手に大苦戦。あと一球取られたらチームが敗戦する状況が三回（三球）あり、それを乗り越えて徐々に調子を上げました。

決勝は、四年連続で同じ相手となるライバル校・野田学園との戦い。「勝率30％ぐらい」などと言われた前評判を覆し、選手たちは堂々とした戦いっぷりで壮絶な試合を3―1で制しました。

「エースの田中佑汰主将（2年）がしっかりと役目を果たし、加山裕選手（1年）、橋本一輝選手（2年）、田原彰悟選手（2年）が苦しみながらも一人一役を必死にやり遂げてくれました。優勝したチームで全勝した選手はエース田中のシングルスだけというのは大変珍しく、みんなで勝ち取った優勝と言えます。日本代表選手で戦った昨年までは『負けられない』という気持ちの中でつかんだ優勝でした。今大会はまるで違い、初優勝したような、とてもすがすがしい気持ちです」と今枝一郎監督は振り返っています。

ダブルスの田中佑汰（右）・加山裕ペア。選手たちは役割を見事に果たした。（写真はいずれもニッタクニュース提供）

四年連続六回目の選抜優勝を成し遂げた高校卓球部も、これでインターハイと合わせて全国大会六連勝です。「今夏のインターハイ卓球競技は豊田市で開催されます。地元愛知で良い成績が出せるように、より一層努力していきたいと思います」と今枝監督は誓いました。

ロボットに餃子づくりの技仕込む

学生たちが愛知県阿久比町の産業用機器製造会社・デンソーウェーブと協力し、同社開発の小型ロボット「COBOTTA」に餃子づくりの技を仕込みました。食品関連の大規模イベントなどで実演を披露し、かいがいしく台所仕事に励む二本のアームが人気の的になっています。

アーム型ロボットのCOBOTTA（重さ四キロ）は、ちょっと手伝ってほしいとき活躍する「人協働ロボット」として開発されました。オープンソースのソフトウエアなどを用い、ユーザーのアイデアに基づいて自由に動きを設定できます。

活用アイデアを求めて同社が「COBOTTAハッカソン」を大学と協力して実施したのは、本学との取り組みが初。知的計測制御研究室（電気学科・古橋秀夫教授）と知能集積システム研究室（機械学科・内田敬久教授）の学生たち計七人が参加して同社ロボット事業部のレクチャーを受け、アイデアを競い合った中から、二台のCOBOTTAで作業分担する餃子づくりが決まりました。

作業工程⑤へらとフライ返しで餃子を取り出す

COBOTTAの餃子づくりは、百円均一ショップで販売されている餃子つくり器（皮と具を載せ、パタンと二つ折りにすると餃子ができる調理グッズ）を用います。二台のCOBOTTAが①皮を一枚ずつ取り上げ餃子つくり器に載せる②へらで具を取り皮に載せる③閉じた皮がくっつくようスポンジで水をつける④餃子つくり器を二つ折りにする⑤へらとフライ返しを用いて餃子を取り出す⑥ケースに八個ずつ入れていく―の作業を分担。学生たちはプログラミングだけでなく、物体を触れずに持ち上げることができる非接触パッドで皮を取り上げるアイデアや、3Dプリンターによる調理小道具の自作など、効率よくCOBOTTAに働いてもらうための工夫に知恵を絞りました。

実演は、初めに「瀬戸蔵ロボット博2018」（三月二十一～二十七日・瀬戸市）で披露しました。続いて「2018中部パック」（四月十八～二十一日・ポートメッセなごや）で本学の西山禎泰客員講師がコーディネートしたコーナーに出展し、作業工程の追加など進化した姿を入場客に見てもらいました。

「一般家庭で使えるCOBOTTAの良さを、よく理解してもらったアプリケーション」と同社ロボット事業部の担当者は学生たちの取り組みを高く評価。六月十二～十五日には、東京ビッグサイトで開催されるアジア最大級の食の技術の展示会「FOOMA JAPAN 2018国際食品工業展」のデンソーウェーブが設けたコーナーで、学生たちも参加して「COBOTTA餃子クッキング」を繰り広げます。

注目のイベントで発表

情報処理技術の国内トップの若手研究者が集い、今後の情報社会に向けた研究動向を発表する「IPSJ―ONE」（情報処理学会主催）に本学の研究者も参加しています。

IPSJ―ONEは、情報処理技術に関心を持つ高校生～大学生の若者を主なターゲットに、二〇一五年から毎年開かれています。会場で一般に公開されるほか、ニコニコ生放送で生中継される注目度の高いイベントです。

本学からは第一回で情報科学科の内藤克弘准教授が「IPv4/IPv6ネットワーク上のシームレス通信技術」と題して発表したほか、三月四日の第四回で情報科学科の梶克彦准教授が「屋内で位置を推定する技術」と題して発表を行いました。

発表する梶克彦准教授

好評博したスマホ講座

本学のオープンカレッジ春季講座の中で本山キャンパスを会場に三回にわたり開講された「もう怖くないスマホ講座」では、学生たちが受講者をマンツーマンで指導し好評でした。スマホの使い方に不安や難しさを感じる初心者のための新規講座で、情報科学科の鳥居一平教授が講師を務めました。受講者は中高年の男女で、鳥居教授が指導するメディア情報研究会（チームAI）の学生たち約四十人が補佐役として加わりました。受講者の隣に学生たちが座り、困ったときの対処法も含めて懇切丁寧に指導しました。最後の講座の終了時に「これからも僕たち学生が皆さんの永遠の家庭教師になります。早速LINE交換してください」と呼び掛けがあり、全員が笑顔になりました。

学生がマンツーマン指導したスマホ講座

日中の卓球元世界チャンピオンたちが友好のラリー

ピンポン外交の縁で四月三日、若水キャンパスに中国・宋慶麗基金会の訪日代表団を迎えての「日中友好条約締結四十周年記念・卓球交流会」（宋慶麗基金会・愛知県日中友好協会・学校法人名古屋電気学園主催）が開かれ、中国と日本の卓球元世界チャンピオン計六人を含む出席者たちが交流試合を通して友好を深めました。

淳和記念館を見学する王家瑞主席

宋慶麗基金会は中国で最も歴史がある公益機関の一つで、中華人民共和国初代名誉主席を務めた宋慶麗先生（孫文夫人）の遺志に従い、一九八二年に北京で設立されました。日中友好条約締結四十周年にあたる今年、基金会の王家瑞主席（前中国人民政治協商会議副主席）が十八人の友好代表団を率い、四月三～四日の二日間の日程でピンポン外交発祥地の名古屋市を訪問しました。

代表団には、一九七一年のピンポン外交時の第三十一回世界卓球選手権（名古屋市の愛知県体育館で開催）男子団体で優勝した郗恩庭さん、梁戈亮さんのほか、女子で世界選手権優勝者・五輪金メダリストの喬紅さん、二〇一三年ワールドカップ団体一位の常晨晨さんが参加しました。

一行は、この日は愛知県知事表敬訪問、県体育館「ピンポン外交記念モニュメント」見学などの後、学園の若水キャンパス淳和記念館に到着。後藤泰之理事長や、第三十一回世界卓球選手権女子団体で優勝した杉本（旧姓今野）安子さん＝愛知工業大学卒業生、竹内（旧姓小和田）敏子さんらが出迎えました。

日中国交正常化につながったピンポン外交は、第三十一回世界卓球選手権に中国代表団が参加したことがきっかけになり、当時の学園理事長・後藤鉀二先生の努力の結果もたらされました。一行は、淳和記念館メモリアルギャラリーに展示されたピンポン外交の関連資料などを見学した後、卓球交流会の会場となる喬徳館（高校体育館）に移動しました。

喬徳館では高校吹奏楽部の演奏に続き、後藤理事長が「小さなピンポン玉が大きな地球を動かす」といわれたピンポン外交の成果に触れ「本日の交流会を通じてさらに友好が深まることを期待しています」と歓迎の挨拶。これを受け、中国の鄧偉・駐名古屋総領事が「記念すべき年の卓球交流会は特別な意味を持ちます」と期待を込めて挨拶しました。

卓球交流では、初めに中国の元チャンピオン四人と吉村和弘選手、木造勇人選手ら愛知工業大学卓球部男女選手がペアになり、ダブルス戦を二試合。次に基金会の王主席も試合に参加して軽快な動きを披露しました。

盛り上がりを見せたのは、郗恩庭・竹内敏子組と梁戈亮・杉本安子組のピンポン外交時の優勝者四人によるダブルス対戦で、年齢を感じさせない「友好のラリー」に周りから大きな拍手が送られました。

友好のラリーを終え握手を交わす（左から）竹内敏子さん、梁戈亮さん、杉本安子さん、郗恩庭さん

中学生に熱血指導する郗恩庭さん

この後も名電の中高卓球部員と代表団との交流試合などがあり、郗恩庭さんらが中学生部員に熱血指導する姿などが見られました。

あいわ幼稚園で入園式

名古屋市名東区の姉妹学園・あいわ幼稚園で四月七日、入園式が行われ、百人の子供たちが園に仲間入りしました。後藤泰之園長が新入園児たちに「おめでとうございます。これからは幼稚園では先生が皆のお母さんです。困ったことがあったらすぐにお話ししてくださいね。元気よく幼稚園に通ってきてください」と優しく語りかけました。最後にクラスごとに、園長先生と一緒ににぎやかに記念撮影を行いました。

挨拶する後藤泰之園長

愛名会総会開く

クラブ活動後援会との統合など報告

学園の後援組織・名古屋電気学園愛名会の平成三〇年度総会が五月二十一日、名古屋東急ホテルで開かれ、会員や学園関係者ら四六五人が出席しました。

挨拶に立った佐々木眞一会長は、二九年度の事業展開などに触れて「会員各位の一層のご理解とご協力を」と呼びかけました。続いて名誉会長の後藤泰之学園理事長が支援への感謝を込めて「やる気と元気のある学生をこれからも育てていきます」と挨拶しました。

総会では、清水建設常務執行役員・名古屋支店長の谷口寛明氏が新たに副会長に決まったことや、名古屋電気学園クラブ活動後援会との統合、二九年度の事業・決算、三〇年度の事業計画・予算などが報告されました。

新副会長の谷口寛明氏

クラブ活動後援会は、学園設置校の課外活動団体の支援を目的に二四年度に発足。その活動をさらに充実させるため愛名会との統合を一年かけて検討し、昨年五月のクラブ活動後援会総会で統合案が承認されました。今後の運営は、愛名会の事業計画にクラブ活動後援事業を追加し活動を続けます。これに伴い、クラブ活動後援会会員が統合後も引き続き会費の納入を希望する場合は、愛名会クラブ活動協賛金として受け入れます。

総会後、本学機械学科の生津資大教授が「ものづくり教育が生み出すナノテク研究―直径1・5ナノメートルのカーボンナノチューブ物性解明に挑む―」と題して、続いて経営学科の小林富雄教授が「フードロスと世界のフードビジネス―CSV（共有価値の創造）の本質―」と題して、それぞれ講演しました。両教授は最新の研究成果を踏まえ、研究室で取り組んでいる人材育成についても話しました。

講演する生津教授

講演する小林教授

一方、クラブ活動後援会の最後の総会となる平成三〇年度総会は、五月十一日に若水キャンパスで開かれました。

挨拶する高橋治朗・クラブ活動後援会長

高橋治朗会長が「皆様の支援の切なる思いを統合先の愛名会の皆様方に託し、引き続き力強いご支援をお願いしたいと思います」と挨拶。総会終了後に中高の野球、バレーボール、フェンシング、卓球、吹奏楽の各部監督・顧問が挨拶に立ち、これまでに受けた支援への謝意を述べました。

階層別事務職員研修

ワークショップ形式の事務職員研修

学園の平成三〇年度事務職員研修は五月十、十一、二十四日の三回、八草キャンパスAITプラザ三階会議室で開かれ、管理職と一般事務職員が「発生型問題解決（発生した問題の本質的な原因を知り、解決する手法）」について理解を深めました。

職員の能力・資質を向上させるためのSD研修義務化を受け、論理的思考力養成を目的に昨年度に実施された「ロジカルシンキング研修」に続くステップで、講師は昨年と同じ「プレセナ・ストラテジック・パートナーズ」から派遣されました（十、十一日は富沢裕司氏、二十四日は小林偉斗子氏）。

研修に当たり、後藤泰之理事長が「中期経営方針を共有し、実行に向けて取り組むためにも、それぞれの持ち場で学園にとって何が必要か、何ができるのかをもう一度見つめなおしていただきたい」と呼び掛けました。

参加者は五～六人ずつのグループに分かれ、ワークショップ形式で研修を受けました。問題解決のための「Where＝問題の特定」→「Why＝原因の深掘り」→「How＝対策の考案」の流れを踏まえ、具体的な「売り上げが低下した東京タワー」「リピーター客からの利益が減少した牛丼チェーン店」といった課題に取り組みながら、漠然とした問題点を適切な切り口を用いて分解し、絞り込む手法などを学びました。

討議した内容を発表する職員